

交 流

和文論文作りを通して コミュニケーションを考える

その3 「正確に」と「あいまいな」

呉大学看護学部
山下 洵子

「休みの日には、カラオケにでも行くんですか？」と学生にきかれた。「とんでもない！ 私は音痴よ」。「それも、並の、ではないの。並はずれてよ」と付け加えるながら、あらためて考える。なぜ、音痴と呼ばれるのか？

歌うという行為は、限りなく「正確に」音符に従って音を出す、ということである。絶対音をもつ人は、半音の半音のそのまた半音のずれをも区別できる、という。そのあたりの音でいい、という「あいまいな」容認はないようだ。

■ 数値という符号

音符は、いってみれば数値を置き換えた符号である。つまり、同じ音程であれば、1つの波にある振動数は、どんな楽器にも共通。ピアノであろうとバイオリンであろうとフルートであろうと、ドはド、レはレ、ラはラ、みな同じ音程となる。だから、名ギタリストがラの弦を引いても、音痴の私がピアノのラの鍵を叩いても、同じようにラの音として響く。物理の法則に「正確に」従ったごく当たり前の話である。前号¹⁾で、自然科学の論文では伝えたい情報をできるだけ数値で表す工夫をする、と述べたが、この音程の話はそれに繋がる。数値（振動数）が同じなら、どこでも誰にでも共通な情報になるといういい例であろう。

数値は一つの情報しか伝えないから、聞き手（読み手）と話し手（書き手）のあいだで意味を取り違える恐れがほとんどない。情報交換の介在にまことに都合がよい。

もう一つ例を出してみよう。

数年前の話であるが、我が家にモンゴルからの1泊2日のホームステイ客を迎えたことがある。彼の母国語は、もちろんモンゴル語。旧ソ連へ留学されたことがあってロシア語がわかる、と紹介者からきいていた。けれども、私にはどちらもチンプンカンプン。二人のあいだに共通の言語はなかった。

ところが、結構、コミュニケートできたのである。互いに、見振り手振りはもちろんのこと、写真や絵図を動員したり絵を描いたりしながら実に楽しいやりとりができた。家族の写真を持って来られたわけでもないのに、彼は31歳、奥さんは29歳、9歳の息子さんと7歳の娘さんがあり、家が二つあって普通の家とゲル（遊牧民特有の移動式家屋）、車が2台あってバンと普通乗用車。車で彼の住むゴビに近い地域から首都ウランバートルまで行くと8時間かかるが飛行機では2時間、ウランバートルにある一番高い建物は14建て…など、実にたくさんを知った（プフオチルさん、ごめんなさい。もう記憶がだいぶ薄れてしまって、あなたからあのとききいた数字を「正確に」思い出せません）。そのとき、一番役立ったのは数字。つくづく、数字は世界共通語である、とあらためて感じ入ったものである。

やました じゅんこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

■ 数値はいつも客観的情報を提供する!?

「A物質 7g と B物質 18g を C液 500ml に溶かして95°Cで1時間加熱すると、D物質 12g が生成する」という文献に出会った、としよう。ここにあるすべての数値はそれ以上もそれ以下の値も意味しない。あいまいなところがないうえ、万人共通の意味をもつ。この通りに追試すれば、誰がどこでやろうと、同じ結果が再現される。だからこそ、自然科学の分野では、伝えようとするのをできるだけ数値で表すのがもっとも妥当であるとされている。

例えば、1時間。私の時計で1時間0分0秒まで読みとれる。もっと精密な時計を使えば、それ以下の桁まで正確に計ることができる。この単位には前後がある（つまり過去、現在、未来がある）にしても、同じ軸のうえを流れている。そして、人の介在があろうとなかろうと、それどころか、生き物という存在と全く独立して、絶対的に存在する（ように見える）。

では、ほんとうに、1時間は、いつでも誰にとってもまったく同じ1時間だろうか？

東京から沖縄に住むようになって「時間の流れや時間のルールが、随分と違う」とショックを受けた本川²⁾は「動物によって時間が違う」という。ナマコにはナマコの時間が、ネズミにはネズミの時間が、ゾウにはゾウの時間があり、それぞれの動物が感じる時間の速さは我々ヒトとは違っているはずだ、という。彼はそれぞれの心臓の拍動時間が違うことにヒントを得て、「動物の時間は体重の4分の1乗に比例する」という法則を見つけた。つまり、「ゾウの体重はハツカネズミの10万倍だから、時間はゾウの方が18倍ゆっくりだ」という計算になる。」

時間のことはちょっと実感がわきにくいだが、高さや長さや大きさなどのことになると、私自身、動物によってかなり違うだろうと合点した体験がたくさんある。例えば、犬の背丈までしゃがんだとき、犬の目の位置で世の中を見るとずいぶん違った風景が見えるものだとあらためて驚いたとか、ノミが跳ねる30センチメートルは、体の大きさを基準にしたらヒトにはとてもまねができる距離ではないとノミの跳力にえらく驚いたとか、子供のときに泳いだ広い大きな池に大人になって出かけてみたら、思いの外、こじんまりした池だったので拍子抜けしたとかの体験など、あげるときりがない。

さらに、同じヒトという種をとってみても、人により、また同じ人でもときにより場合により、違う単位があるのを日常しばしば経験する。例えば、同じ1時間でも、待つときの長いこと、長いこと。私くらいの世代の人は、「もういくつ寝るとお正月」と、指折り数えてお正月を待った記憶がある人が多いだろう。お正月や節句や祭りくらいしか楽しみがなかったあのころ、その日までの月日がなんとのろのろ流れていたことか。逆に、歳をとるに従い、若い頃より月日が足早やに過ぎ去っていく、と感じる人は多いのではないだろうか。それは、楽しい遊びに興じているとき、恨めしいほどにときがたつのがはやい、と感じる感覚ともまた違うような気がする。

やっかいなのは、この「違うような気がする」ということである。同じ1時間を待つとき、待った！という感じが他の人の待った！という感覚とどの程度同じなのかあるいは違うのか、わかりようがないのである。

■ 共有することば

「きれいね」

看護棟4階南の踊り場から眺める阿賀港の夕焼けは美しい。暮れなずむ空と山と海と沖合の島々とかゆっくり溶け合ってゆくのを同僚と眺めながら、今日の疲れをほぐす。もう一息頑張っ、今日中に仕上げておかなければならない仕事を片づける元気をもらう。

光の醸し出す風景を分析し、光の波長や強さやそれらを構成する光の割合などを解析し、科学的に綿密に数値化することは可能であろう。そのなかから、同僚と私とが双方の「きれい」として同意できる数値を「正確に」見つけだすこともできなくはないだろう。

けれども、そこまでできたとしても、その数値が与える情報を同僚と私とで同じように捉えている、という保証はない。仮に目の性能が同僚と同じだとしても、私に届く光の情報が同僚の目にどのように

映っているのかを知る手だてではない。違う可能性がある、と予想しても、どう違うのかさえ見当がつかない。私が赤いと感じている色は、同僚には私が感じとる緑として映っているかもしれないのだ。

ましてや、目にとらえた情報を、脳がどう処理しているかになると、もうお手上げ。その人のそれまでの歴史によって違って捉えられるだろう。阿賀港の夕焼けを同じように「きれいね」と表現したとしても、富士山の頂上で恋人と眺めた夕日を思い出す同僚の感じ方は、ミシシッピー川の上に広がる夕焼けを異国で働く厳しさのなかで眺めた私の感じ方と重なりはしないだろう。1000人の人がいれば、1000人の歴史がある。1000通りの違う夕焼けの感じ方があるだろう。

自然科学の分野では、1時間を「正確に」1時間として他の人と同じ感覚で共有できる。しかし、日常生活ではかなり「あいまいな」もので、私の1時間は他の人の1時間ではないことが多い。最近、高齢の親に付き合いながらしばしば思うことだが、同じ1時間といっても、私にとってはまったく無駄な1時間でも、相手にとれば100万円出しても買えない貴重な1時間である、とわかることがある。友人からもらった深刻な内容の手紙を読みながら、行間から、実は、1時間は1日を意味している、と察することもあれば、「あとは推して察すべし」と、時間に従うこととはまったく違うことを暗に要求している、と気づくこともある。

いろいろ工夫して、感覚器が捉えることそして脳で処理することを数値に置き換えたとしても、悲しいかな、私たちは、自分以外の人と感覚も感性もは共有できない。自分以外の人はどう感じているのかの、ほんとうのところはわかりようがない。その「あいまいな」部分が残ることを前提で、他の人とのコミュニケーションを成り立たせなければならない。

それは、相当に努力と忍耐がいる作業である。常に相手とのずれを調整していなければ、取り返しがつかなくなることもある。善意のつもりがまったく逆に悪意にとられることもある。せっかくな関係が築かれたと思ったすぐ次の瞬間、たった一つのことばでそれが崩れていくことさえある。一つのことばの誤解が次の誤解を生んで、それが重なって行って、気付いたときには相手のなかに自分の考えている自分とまったく違う自分が居座っていてがっくりくることもある。

無機的に分析できる自然科学の場と違って、人と人との関わり合いでは「あいまいな」部分の寄せ集まりで、それなりに折り合って構成されていくのかもしれない。それを人の世の楽しさとして悦び謳いあげていく知恵があれば、自分とは違う尺度にしっかり向き合った楽しい生き方ができるであろう。

参考文献

- 1) 山下洵子：和文論文作りを通してコミュニケーションを考える その2 「美しい」と「愛している」. 看護学統合研究 1 (2) : 53-55, 2000.
- 2) 本川達雄：生命の時間・ビジネスの時間. 西山賢一編. 生命の知恵・ビジネスの知恵. 東京：丸善ライブラリー, 29-66, 2000.